



## 侵略思想のチャンピオン（5）

= 「松陰思想の対極構想」 =

伊藤 正通

久々の寄稿なので少々おさらいをさせていただく。ご記憶の方もいらっしゃるかもしれないが、当シリーズ（1）で紹介した松陰発言の要点を切り取って以下に再掲する。

「朝鮮のごときは古くからわが国に臣属していたが、いまはやや高ぶったところがある」

「朝鮮をうながして昔同様に貢納させ・・・」

「神功皇后のまだなしとげられなかったことをなしとげ・・・」

これを見ると、どうやら松陰は古事記・日本書紀の記述内容を史実と信じ込んでいたようだ。そうでなければこのような書きぶりにはならない。どういう経路でこうした神国思想に染まったのか。史学に関するかぎり小生は永遠の若葉マークなので深入りはできない。が、水戸学や国学の影響によることは間違いないだろう。ほとんど神がかりの天皇教だ。学問と呼ぶには無理がある。

松陰の神国思想を継承した門下生たちが、薩摩と組んで武力倒幕を仕掛け、戊辰の内乱と函館戦争を経て、王政復古・祭政一致のトンデモ政権を立ち上げ、有司専制の藩閥政治を推進した。アジア世界総体にとっての災厄である。その帰結が77年後、大東亜共栄圏の破綻と1945年の惨憺たる無条件降伏だ。このことは前にも触れた。

敗戦で松陰思想の命脈が途絶すれば真の意味で新しい日本が誕生したはずである。しかし、そうはならなかった。松陰の思想は例えば岸信介・安倍晋三一族はじめ民族派右翼によって温存され、その後の日本会議等の跳梁跋扈をもたらして令和の現在にいたっている。

それでも、戦後「民主主義」教育で学んだ方々は、小生含めて誰もが教わったであろう。ここでも明治維新は輝かしい事件であり続けた。欧米列強の外圧に対処できなかった無能な幕府。これを葬って近代化・殖産興業・富国強兵に道を拓いた偉大な社会変革だった、と。

敗戦後、アカデミズム史学では講座派マルクス主義による歴史解釈が主流となった。この歴史観は歴史には法則があって、幕藩体制から統一国家への転換は歴史的必然という立場をとる。したがって明治維新は封建制から一歩進んだ絶対王政を成立させた偉大な変革となる。あばたもえくぼ。廃仏毀釈や祭政一致による神がかり政治は過渡期における必要悪、コロナワクチンに伴う副反応程度の認識か（これは今後の宿題）。

それでは松陰同様、記・紀神話に痺れ、万世一系の天皇をいただく体制を日本の国体と信じて疑わない右派陣営あるいは保守陣営はどうか。もちろん、当然と言えば当然だが、これまた明治維新万々歳。天皇主権を700年にわたって篡奪し、国体を穢してきた武家政権にトドメを刺したとして・・・。

奇妙な話だが、維新礼賛にかけてはオール・ジャパンなのだ。司馬遼太郎のような売文業者が国民作家として人気を博したのも、その背景に維新＝歴史的快挙という通奏低音になじんだ国民意識のなせる技ではなかったか。

この多数派意識に悪乗りしてか、1990年代後半には東大教授の藤岡信勝らが「新しい歴史教科書をつくる会」を旗揚げした。藤岡は「自由主義史観」を唱え、司馬遼太郎の歴史観を「司馬史観」と命名して自己の主張への支持拡大を図ったことは記憶に新しい。

近頃では「維新」を名乗る正体不明の政党まで登場した。「維新」を標榜すれば何でも許される、国民に支持される、との政治判断なのだろうか。

それでは徳川政権とそのリーダーたちはそれほどまでに無能で頑迷固陋だったのか。歴史法則によって退場が運命づけられた暗愚な政権だったのか。あるいは、武力倒幕と戊辰戦争さえなければ、明治政権とは異質の、もう一つの近代日本を建設する可能性を備えた政権だったのか。

こんなことを言うに「歴史にイフはない！」のひとことで口撃されるのがこれまでの常識だった。ところが、ところが、現在は史学界もずいぶん変容したようである。永遠の若葉マークたる小生が言うのもおこがましいが、歴史には法則などないとの学説が提起されているとのこと。バタフライ理論とかいうそうさ。マ、ここでは立ち入らない。

さて、小生は実際の歴史過程とは異なる、よりましな近代日本の可能性はあったとの前提に立って素人丸出しで詮索してみる。手掛かりにしたのが幕末期の憲法構想。「なにになに、チョンマゲと二本差しの連中が憲法構想?!」と首をかしげる向きもあろう。だが、あったのである。それも神がかりの国学思想など足下にも及ばない開明的で近代的な憲法草案がいくつも提起されていたのである。

『日本近代思想体系』という叢書がある。1988年から1992年にかけて岩波書店から刊行された。全24巻（うち別巻1）。当時の小生は賃金労働者だったが、やり繰りすればなんとか購入できた。しばらくホコリをかぶったまま本棚に鎮座していた。

叢書第9巻のタイトルが「憲法構想」。先入観が災いして、大日本帝国憲法に至るまでの維新以降の憲法論だろうと早合点してしまいそうだが、違う。文久・慶応年間という幕末期の、それも幕府側サイドの議会論、憲法草案の収録と紹介で始まっているのだ。

欧米列強のアジア進出と植民地化、第1次・第2次アヘン戦争での清国の無残、ペリー来航による開国、ロシア帝国の南下……。こうした情勢への対応として幕府自身が政体の自己変革を急いでいたことの証左である。

編集者の・江村栄一氏は、

♣大久保忠寛（幕府大目付、外国奉行）の「公議会論」、

♣赤松小三郎（信州上田藩士）の「議政局論」

の2本を議会論。そして、

♠津田真道（幕府開成所教授）の「日本国総制度」

♠西 周（幕府目付）の「議題草案」（これは叢書第1巻「開国」に収録）

の2本を憲法草案としている。

このなかでも秀逸なのは赤松草案だ。これは松平慶永（越前藩主）、島津久光そして徳川政権の三者に提出した意見書なのだが、よくもここまで言いたいほどの水準に到達している。

主張のベースは「天幕御合体、諸藩一和」つまり朝廷と幕府、諸藩の大同団結ということになる。ただし天皇の地位については、神がかりの尊攘派や明治憲法派と違い、絶対権力は認めない、持たせない。天朝が権威をもつには「徳を備える」「道理にかなう」「公平の命令を下す」という条件を満たさなければならないとし、これを担保するため、誰もが背くことができない権力を持つ議政局（＝議会）の設立が必須としているのだ。そして議政局を国権の最高機関と位置づけ、上院と下院の二院制をとるとした。また、天皇とその内閣が議政局の決定に拒否権を行使しても、議政局の再決議でその内容を全国に布告できるとするのだ。下院議員の定数は130人で、これを普通選挙で選出するという。いやはや、赤松構想がこのまま進めば、武力倒幕も戊辰戦争も起こらず、オール・ジャパンの開明政府が誕生したことになる。

徳川慶喜の大政奉還によって赤松構想は実現しつつあった。当初、赤松構想は幕府の他、土佐、薩摩等の諸藩に受け入れられていたのだ。しかし薩摩の武力討幕派の台頭で流れが急変し、赤松小三郎の存在と構想は抹殺の対象となる。

1967年（慶応3年）9月、西郷隆盛と大久保利通が放った（とされる）暗殺集団によって赤松は京都で襲撃され絶命。享年37。実行犯は中村半次郎（桐野利秋）以下の薩摩藩テロリストだった。この事件によって、日本は内乱の時代に突入する。

幕末史の流れは複雑すぎるし、多くの事件は謎に包まれている。よほどの好事家でないかぎり全体を見通すことはできないのではないかな。若葉マークの小生はとくに理解に苦慮する。なぜ薩長が最終的に武力倒幕に走ったかは最大の疑問だった。いまでも確たる説明には出会えていない。しかし回答の一端が意外な方面から示された。濫読もあながち無意味ではない。

#### 【回答の1】 グローバル・ヒストリー、マネー・ウオーズ、国際武器商人の暗躍

世界の覇権争いのカギを握るのが幕末日本。国内の出来事と思われてきた幕府と反幕勢力の綱引きも、グローバル・ヒストリーの視点で見ると、まったく異なる様相を呈する。武器商人たちは、アメリカ南北戦争の終結で有り余った武器の売却先を日本と定めた。

『新・幕末史』 NHKスペシャル取材班著 幻冬舎新書 2024年

#### 【回答の2】 アーネスト・サトウの暗躍

イギリス外交官でありながら、アーネスト・サトウが本国方針を無視して、反幕派に徹底して内戦を教唆煽動。目的は、内戦に持ち込み、イギリス資本に武器売却で大儲けさせること。

『江戸の憲法構想』 関良基著 作品社 2024年 P108

こんなこと何をいまさら、とお笑いください。小生は永遠の若葉マークであるのだ（開き直り）。

さて、松陰思想に噛みつくシリーズは今号で打ち止めとし、次回は赤松小三郎構想の詳細と経歴について触れさせていただきたい。その狙いは、薩長の権力掌握がなければアジア人一般は数等幸せな人生を謳歌できたであろうことに尽きる。

（続く）



## 「イスラエル軍元兵士が語る非戦論」 (集英社新書)

畠山 勝巳

この本を読む気になったのは、現在の中東パレスチナ問題、戦争について知らないことが多すぎると思ったからである。要するに、イスラエルとパレスチナ人の「戦争」というレベルでしかとらえきれていない私の「戦争観」、その背景にあるある歴史や世界情勢を知る必要があったからである。ある新聞の「書評」を読んで、私も読んでみるか、となった。

読んでみて、ビックリした。この内容は、我々が唱える「非武装中立」の思想ではないか、ということである。まず、著者はダニー・ネフセタイというイスラエル人である。そして現在は、日本人と結婚して秩父で家具職人をしている。イスラエルで生れ、イスラエルの「愛国教育」をうけ、イスラエルでは「エリート」と言われる「空軍パイロット」を経験し、除隊後、世界を放浪し、日本人と知り合って結婚した。そして、イスラエルの「愛国教育」に疑問をもって、軍隊に否定的になった。

この本の「はじめに」にはこう書いてある。「次世代に豊かな地球を引き渡すために、大人の責任として戦争を止めるためにはどうしたらいいのか、そのカギになるのは敵に攻められないよう『抑止力』を持つ、『武器による平和』という理屈から、私たちが卒業することです。それは非現実的でも「お花畑」のような考えでもなく、逆に極めて現実的であることを皆さんに実感を持って、受け止めてもらうために、私の体験を参考にしていただけたら、幸いです。」この本の内容は一言では説明できないが、現在の政府自民党が唱えている「抑止力」や自衛隊の存在を否定している。平和を子孫に残すためには、「非武装」こそ最大の目標であることを唱えている。必読願いたい。

ほかに、「非武装中立論」として「自衛隊も米軍も日本にはいらぬ」（花岡蔚・花伝社）がある。この人は、東大卒で銀行、大手家電メーカー等15年間海外勤務を経て、市民運動の中から、「護憲運動」に参加。「非武装中立論」を具体的に展開している。

## F・パヴロフ「茶色の朝」(大月書店)

山縣 稔

「ペット特別措置法」によって、茶色以外のペットの飼育が禁止された。その後、あらゆるものが茶色でなければならなくなり、違反した国民は「国家反逆罪」に問われ「自警団」によって何処かに連れ去られる。そんな寓話を淡々と綴った絵本である。21世紀初頭、極右政党「国民戦線」の台頭で民主主義の危機が叫ばれたフランスで出版された本なのだが、いまやヨーロッパでもアメリカでも「極右」に対する抵抗感が薄れつつあるかに見える。そして閣僚の靖国参拝に驚かなくなった日本でも……。あらためて読み直してみたい一冊である。



発行元 共同テーブル秋田 (編集：山縣)